爆死する子ら 目の前に

ペシャワールから沖縄へ ■1

中村 哲

平和の舞台裏で

沖縄から出撃する米軍は非情な存在だった。

縁とは不思議なものである。ちょうど沖縄からこの原稿依頼があったころ あるご高齢の患者から手紙がきた。脳梗塞(こうそく)で入院し私に診てもらった礼状である。沖縄出身者 ひめゆり学徒隊の生き残りで 静かな語調で心情が記されていた。

「生きるものが動く地上で次から次と恐ろしい事件が起きます。何よりも、戦を知らぬ人々が簡単に起こす戦争を恐れます。（中略）大和の文化が消え、日本人の魂と心意気 誇りがなくなり、美しい瑞穂の国に作り上げた昔の人々に申し訳なく思うばかりでございます」

折しも「拉致問題」の報道が過熱していたころで、ある日 東京に行ったとき タクシーの運転手が「こりゃ（北朝鮮と）戦争だな」と興奮していた。旧日本軍による数万の朝鮮人強制連行などに触れようものなら リンチにでも遭いそうな雰囲気に日本中がとりつかれていた。

その中で この一通の便りは 人をほっとさせるものがあったのである。

ちょうど二年前、国中あげて アフガン空爆や復興の話題でもちきりだった。幸か不幸か、わがペシャワール会もあちこちに引き回され おかげで「沖縄」とも縁が深くなった。

昨年一月 招かれて現地事情を語ったときなど 真剣に聞き入る人々の姿勢に、逆にこちらが一種の感銘を受けその上、「沖縄平和賞」を受けたときは、特別な感慨があった。

叔父の一人は沖縄戦で死んだ。祖母は、「わが子が死ぬほどつらいことはこの世にない」と、語るたびに目を潤ませていた。近しい者の死を悼む心情は アフガニスタンでも同じである。多くの子供たちが空爆や 米軍の落としたクラスター爆弾の爆発で死に 混乱による食糧輸送の停滞で 餓死、凍死した。

この現実を目の当たりにして訪沖したとき、沖縄から出撃する米軍はあまりに非情な存在であった。

わが基地病院のある国境の町・ペシャワールと沖縄とは、単なる「平和」という抽象的理念で結びついているわけではない。ペシャワールは、パキスタン側の「辺境」で、古代から東西の文化が行き交い、「民族の十字路」とも称される中央アジアの国際都市だ。

そればかりでなく パキスタンにとって まさに「本土の盾」という役割も、どこか沖縄と似ている。すなわち、連邦政府は米軍に基地を提供して「対テロ戦争協力」を打ち出し 見返りに経済協力を受けている。そうしないと国家がつぶされてしまうからだ。

だが、盾とされる側はたまったものではない。昨年秋、ペシャワールを州都とする北西辺境州では、誇り高い現地住民の圧倒的支持で「反米・州政権」が誕生した。州政府は公然と米軍の軍事活動を非難 非協力を宣言し、国境では友軍であるはずの州兵が米軍と交戦する事件も発生している。これは地下でアフガン側ともつながり、確実に不穏なうねりを生み出している。

沖縄平和賞の賞金で、アフガニスタン東部山岳地帯の村、ダラエ・ピーチに建設中の診療所「オキナワ・ピース・クリニック」＝2002年11月7日

一方、オキナワもまた、アジア最大の米軍基地を抱え、良くも悪くも本土とは別格に取り扱われてきた。大田実少将は「沖縄県民かく戦えり。後世 特別の御高配賜らんことを」と残して自決した。だが「特別の配慮」があるにはあったが、それは戦後も本土の盾であり続けることだった。

経済繁栄も平和主義も、沖縄を踏み台にした戦争特需で支えられてきたことを実感する本土の人は、少なかったと思う。私もまた、その一人だったからだ。しかし今、現地に加えて沖縄という舞台裏を実感し、裏切られた気持ちでいる。

「オキナワ」は自分にとって、本土が失った大切なものを回復する希望である。そして、不条理が不条理として存在し続ける実体そのものである。

（医師・ペシャワール会現地代表）

「ペシャワールから沖縄へ」は毎月第4日曜日に掲載します。